

『シンドバード物語』 祖本はいつ頃、 どこで書かれたのか

The Birth of the Book of Sindbad—when and where?

西 村 正 身（作新学院大学人間文化学部名誉教授）

東洋系「シンドバード物語」の諸版には、物語本文だけではなく序文をも備えている版が4本ある。サマルカンディーによるペルシア語版 ZaS¹⁾ (1160年頃)、作者未詳のペルシア語韻文版 SN²⁾ (1375年) の広本2本と、アンドレオポーロスによるギリシア語版 Ss³⁾ (11世紀)、フェルナンド3世の息子であり、1251年『カリーラとディムナ』のスペイン語訳を命じたアルフォンソ10世の弟ファドリケ王子の主動によってアラビア語版から1253年に訳されたと記されているスペイン語版 LE⁴⁾ の小本2本の計4本である。

これらのうち、「シンドバード物語」の成立の問題を考えるに当たって「とにかく重要な価値を」持つのは、B・E・ペリーの指摘する通り、ペルシア語版 ZaS とギリシア語版 Ss の2本である⁵⁾。ギリシア語版 Ss には、アンドレオポーロス自身の序文のほか、その翻訳の際に親本となったシリア語版（現存するシリア語版 Sn の親本。亡失）の序文も（全文ではないかもしれないが）幸いなことに訳されている。この2本の序文こそが、祖本あるいは小本の出発点であるムーサー本に関する貴重な情報を与えてくれるのである。

ギリシア語版 Ss の序文の検討から始めよう。訳者アンドレオポーロス自身の序文は17

¹⁾ ① *Sindbād-Nāme yazan Muḥammed b. Alī aṣ-Ṣahīrī as-Samarqandī*, mukaddime ve haşiyeler neşredon A. Ateş, University of Istanbul Publications, Istanbul, 1948, pp. 1-345/ ② *Sendbād-Nāmeḥ, Moḥammad ibn'Alī Ṣahīrī Samarqandī*, edited by Dr. M. B. K. al-Dīnī, Mirās-e, Maktub, Tehran, 2003/ ③ *Zahiri de Samarkand, Le Livre des sept visirs*, traduit du persan par Dejan Bogdanović, Sindbad, Paris, 1975

²⁾ W. A. Clouston, *The Book of Sindibad*, Glasgow, Cameron, 1884, pp. 1-121. ブリティッシュ・ライブラリー所蔵写本 (IO. ISL 3214 <Ethé 1236>) 2b-9b に献辞を含む序文があり、「ペルシア語を話すアラブ人が雄弁に物語ってくれたところによると」(9b) という謎めいた断り書きで物語が始まる。読めないのが英訳からの推測になるが、年代的に見て祖本との直接的な関係はないであろう。

³⁾ ① *Mich. Andreopuli Liber Syntiae*, edidit Victor Jernstedt, Mémoires de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Petersbourg, VIII série, vol. XI, No. 1, 1912/ ② ミカエール・アンドレオポーロス『賢人シュンティパスの書』西村正身訳、未知谷、2000（「哲学者セクンドスの生涯」を併載）

⁴⁾ ① J. E. Keller, *El Libro de los engaños*, rev.ed., 1959/rpt. Romance Monographs, Inc., Reprint Series No. 2, Mississippi Univ., 1983/ ② 『中世ペルシア説話集——センデバル』谷口勇訳、而立書房、1996

⁵⁾ ① B. E. Perry, *The Origin of the Book of Sindbad*, Walter de Gruyter & co., Berlin, 1960, p. 84/ ② 西村正身訳『シンドバードの書の起源』未知谷、2001、139ページ（以下参照箇所は本文中に記す）

行の詩から成るが、要するにシリア語からギリシア語に訳したのは自分であるということ
を記しているもので、今はそれ以上の意味を読み取る必要はない。より重要なのは「原典
の序」すなわち「シリア語の書物の序」のほうである。その全文は以下のとおりである⁶⁾。

原典の序、すなわち、比較照合するために用いた、賢人シュンティパスと呼ばれてい
るシリア語の書物の序は、その言い回しによれば以下の通り

示唆に富んだこの物語は、私が、ペルシア人たちの王キューロスとその嫡出の息子
とその師シュンティパス、さらには王の七人の賢者たちと、他の誰よりも邪悪で恥知
らずなひとりの王妃と、王子の継母である彼女が王子に対して企てた中傷と陰謀につ
いて、書き記したものである。この物語は、さかのぼること、ペルシア人のムーソス
が、この書物を手にする人たちの役に立つことを願って、書いたものである。

この序文は前半と後半の2つの部分から成っている。その前の「原典の序」で始まる2
行分の断わり書きは訳者アンドレオポーロスの書き加えたものと思われる。序文前半に出
る「私」が誰なのかは未詳であるが、考えられるのはシリア語版の作者か、あるいはシリ
ア語版の親本であるアラビア語版の作者すなわちムーサーその人か、そのどちらかであろ
う。祖本の作者ということも可能性としてはありうるが、ムーサーが祖本を改編して物語
を新しく生まれ変わらせたことを考慮するなら、ムーサーがこの物語を作ったのだと宣言
しても少しもおかしいことではないので、祖本の作者という可能性は低いと見ていいであ
ろう。後半に含まれる「さかのぼること」という言葉の表わす意味を、シリア語版への訳
出の時点から「さかのぼる」ということであると理解するならば、前半の文はシリア語版
の物語そのものを指していることになるのではないか。そうであるのなら、「私」とはシリ
ア語版の作者のことを表わしている可能性のほうが、より高いと思われるのである。ア
ンドレオポーロスがその名を省いてしまった可能性がないわけではないが、むしろ名乗ら
なかったことのほうが不思議であるとさえ言えるのかもしれない。この序文が前半だけで
終わっていたら、ペルシア語韻文版 SN やスペイン語版 LE と同じように、さして重要な
意味は持ち得なかったことであろう。この序文のきわめて重要な意味はその後半部分の
「ペルシア人のムーソスが……書いたものである」というところにこそあるのである。

ムーソスとはギリシア語形であり、ペルシア語では(アラビア語由来の名であるが)ムー
サーという。ネルデケとペリーによれば⁷⁾、このムーサーはムーサー・イブン・イーサー・

⁶⁾ 脚注3参照。自序は原文 p. 2、拙訳 pp. 9-10、「シリア語の書物の序」は原文 p. 3、拙訳 p. 11

⁷⁾ ① Nöldeke, Th., „Bibliographische Anzeigen. Sindban oder die sieben weisen Meister. Von Fr. Baethgen“, in: *ZDMG*, 33, pp. 513-536 (1879), p. 521/②ペリー (脚注5)、原文 pp. 33f.、拙訳 pp. 53f.

アル・ケスラウィーのことであり、「ペルシア語からアラビア語への翻訳家であったばかりではなく、ペルシア出身の有名な散文物語作家でも」あり、874/5年に亡くなっている。そのことは間違いのないことであると思われるが、ギリシア語版序文からたどれるのはそこまでである。つまり、ギリシア語版はシリア語版から翻訳され、そのシリア語版はムーサーのアラビア語版から訳されたということを明確に記しているにすぎない。ムーサーのアラビア語版がムーサー自身のオリジナル作品であるのか、あるいはそれに先行する作品が存在するのかについては、残念ながら何も述べてはいないである。別の言い方をするなら、この序文は、「シンドバード物語」小本系の出所がムーサーであるということの意味しているだけだということなのだ。しかし、それが重要な情報であることは言うまでもない。

それ以外のこと、つまり、祖本に関してはペルシア語版 ZaS の序文に拠るしかない。「ギリシア語版 Ss とペルシア語散文版 ZaS がムーサーとパハラヴィー語祖本の内容を復元するに当たってはとにかく重要な価値を持ちうる」と述べたすぐあとでペリーは、「しかもペルシア語散文版 ZaS はギリシア語版 Ss と一致する場合にのみ重要なのである」（『シンドバードの書の起源』原文 p. 84、拙訳 p. 139）とし、他の箇所では、「ギリシア語版 Ss とペルシア語散文版 ZaS のふたつの版を比較することによってのみ、『シンドバード』祖本の内容の概略を復元することが可能となる。このふたつの別々の伝承が収束する点こそ、……現存のどの資料よりも古い段階に相当するのである」と記している（原文 p.35f、拙訳 p. 55）。このふたつの版の収束する点とは、何よりも共通する22の所収話なのではないだろうか。ペリーのこの発言はギリシア語版 Ss を重視するあまりにペルシア語版 ZaS の重要性を不当に軽視する発言とみなしていいと思われる⁸⁾。

では、ペルシア語版 ZaS の序文にはどのようなことが記されているのか、また、そこからどのようなことが分かるのか、それを検証することにしよう。

ペルシア語版 ZaS の序文には次のように書かれている。必要な部分のみを抜粋する。

①その本はシンドバードと名付けられている。ペルシアの賢人たちによって書かれたものだ。どのページも稀有なことや深遠な思索、理解を越えた驚異、不思議なこと、記憶に値する比類なき人物たち、心に留めおくべき貴重なことに満ち溢れている。疲れ果てた心に命を与える水であり、失意に満ちた魂のやすらう庭園である。その功績と栄誉は限りないものだ。（脚注1②アッ・ディーニー版 p.18による。①アテシュ版 p.

⁸⁾ ペリーは枠物語を重視し、所収話には重きを置いていないが、22の共通話が決して無視できないものであることについては拙論「『シンドバード物語』の広本と小本について」作大論集・第8号、2018, pp. 1-14の pp. 2f. を参照。

23)

- ②この「書物の」内容を熟慮し、書かれていることに思いを馳せてもらうために、格言（asmāl）や詩（ash'ār）や伝承（akhbār）を採り入れて装飾を施したので、考えながら注意深く「読めば」、教養のある者も無学な者も、誰でも「この書物を」楽しむことができるであろう。（脚注1②アッ・ディーニー版 p. 19による。①アテシュ版 p. 24では「伝承」のあとに「伝説 āsār」が加えられている）
- ③その本がパハラヴィー語で書かれたものだということと、偉大で博学で公正なアミール、ナーシルッディーン・アブー・ムハンマド・ヌーフ・ブン・ナスル・アッサーマーニー——神がその方の証拠を照らし出してくださいませよう——の時代に至るまで、それを翻訳した者が誰ひとりとしていなかったということは、知っておかなければならない。その博学なアミール、ヌーフ・ブン・ナスルが学者アミード・アブ・ル・ファウアーレス・ファナールギーに、それをペルシア語⁹⁾に翻訳し、誤り伝えられていたり歪められていたりしている部分は取り除いて改めるよう、339年〔西暦950／951年〕に命じた。学者アミード・アブ・ル・ファウアーレスは苦心してその仕事に心を傾け、その書物を完成させた。しかし、その表現があまりにも平板で装飾に欠け、気の抜けたものであったので、言葉は豊かで力強く、技巧も凝らされていたとはいえ、いかなる侍女もその花嫁を飾ることをしなかったし、言葉という乗り物を駆って雄弁を駆使することもなく、金言「を散りばめたり」、恋人たちに衣装を着せて外観を仕上げたりすることもなかったので、あやうく日々のページからすべてが消え失せて、世の中から今にも抹殺されてしまうところであった。しかし、勝利者の幸運が光彩を放った今、それは蘇えり、再び新鮮さと輝きとを取り戻したのである。（脚注1②アッ・ディーニー版 pp. 19f. による。①アテシュ版 p. 25以下はアミール名を「ヌーフ・ブン・ナスル」ではなく「ヌーフ・ブン・マンスール」としているが、その点については後述する）

①は、サマルカンディーがペルシア語に翻訳した本のタイトルが「シンドバード〔物語〕」であったということを表わしている。

②は、ペルシア語版 ZaS がアラビア語改作版から大規模な書き加えをし、枠物語に3つの新しい物語を挿入した版であるとペリーが主張する際の根拠のひとつになったもの（原文 p. 65f.、拙訳 p. 105）と思われる。しかし、拙論『「シンドバード物語」の広本と小本について』で述べたように¹⁰⁾、アラビア語改作版からの書き加えも、新たな物語の挿入

⁹⁾ 原語は脚注1の①で「ファールシー」、②で「パールシー」。どちらもダリー語のこと。

¹⁰⁾ 脚注8の pp. 10f.

もなかった。3つの物語は初めからあったものであり、ここで述べられているのは、あくまでも文飾の問題なのである。そのことは、ダリー語で書かれた物語の表現が「あまりにも平板で装飾に欠け、気の抜けたものであった」という表現から窺うことができよう¹¹⁾。ここには物語の数を増やしたと取れる語句や文はない。サマルカンディーの施した文飾が現代の好みに合うかどうかは、また別の問題である。当時としてはそれが最良の文体であったのであろう。時代がそうした文体を求めていたのである。

③がこの序文の記述の中で、起源の問題に係わるもっとも重要な記述である。サーマーン朝（873～999年）の君主たちはアッバース朝のカリフに敬意を払って、自らをアミールすなわち司令官と名乗っていた。ここに訳したのはアッ・ディーニー版に拠ったものであるが、アテシュ版はアミールの名を、ナーシルッディーン・アブー・ムハンマド・ヌーフ・ブン・マンスール・アッサーマーニーとしている。アッ・ディーニー版の記すナスルはサーマーン朝第4代のナスル2世（914～943）の息子であるヌーフ、つまり第5代のヌーフ1世（943～954）のことであり、アテシュ版の記すマンスールは第7代のマンスール1世（961～976）の息子のヌーフ、つまり第8代のヌーフ2世（976～997）のことである。実は写本には「マンスール」と書かれているのだが、それをアッ・ディーニーは本文中に「ナスル」とし、脚注ではなく解題（脚注1の②p.20）においてそのことを記している。

話を分かり易くするためにサーマーン朝のアミールの問題の部分のみの系図を掲げておこう。ちなみに省略した第6代アブド・アル・マリク1世（343～350/954～961）は第7代マンスール1世の兄であり、ともに第5代ヌーフ1世の息子である。

第4代 ナスル2世 (302～331/914～943)	_____	第5代ヌーフ1世 (ヌーフ・ブン・ナスル) (331～343/943～954)
第7代 マンスール1世 (350～366/961～976)	_____	第8代ヌーフ2世 (ヌーフ・ブン・マンスール) (366～387/976～997)

パハラヴィー語で書かれていた『シンドバード物語』をダリー語に訳すようファナールージーに命じたアミールの名が問題なのであるが、写本に書かれているヌーフ・ブン・マンスール（第8代ヌーフ2世）の在位年と、彼がファナールージーに翻訳を命じたというヘジラ暦339年（西暦950/951年）が合わないのである。

アテシュ（脚注1①p.10注1）とアッ・ディーニー（脚注1②p.20注8）は添え名のほうに注目して、アブー・ムハンマドというのはヌーフ・ブン・ナスル（つまり第5代ヌーフ

¹¹⁾ 黒柳恒男『ペルシア文芸思潮』近藤出版社140p. は「彼（サマルカンディー）は序においてサーマーン朝の訳書が簡潔・貧弱な文体であるので、時代の求めに応じてそれを修飾し、優雅な散文にした」と記す。

1世)の添え名であり、サマルカンディーの記すヘジラ暦339年はその在位期間と一致しているが、ヌーフ・ブン・マンスール(つまり第8代ヌーフ2世)の添え名は、写本にあるアブー・ムハンマドではなく、アブ・ル・カーシムであると記している。ヌーフ・ブンまでは同じなので、サマルカンディーがうっかり名前を間違えたのだというわけである。

今一つ問題をややこしくしているのがB・E・ペリーの意見である。ペリーはこの問題について『シンドバードの書の起源』の本文(原文 p. 36、拙訳 p. 56)で、イスラーム暦339年に西暦960/961年を対照させたうえで、原注72で次のように書いている。

アッ・サマルカンディーがダリー語版の正確な成立年として挙げているイスラーム暦339年は、間違いである。それだと、ダリー語版を作るよう命じたヌーフ・イブン・マンスールの治世(354~375/976~997)と合わないからである。リューによると、大英博物館の写本にはイスラーム暦539年とあるが、これはアッ・サマルカンディーの著作年代に近すぎるので、ありえない。イスラーム暦539年も339年も、359年が誤り伝えられた結果である。アテシュは、間違っているのは339年という年代ではなく、王名のほうであると考えている。彼は、イスラーム暦331~343年に統治していたことが知られているアブー・ムハンメド・ヌーフ・イブン・ナスル・アッ・サーマーニーに置き換えようとしている。

本文を含めたこの記述には重大な勘違いが2つあり、ペリーはその勘違いを根拠に論を組み立てている。1つ目の勘違いは本文中に記されているイスラーム暦339年に対応する西暦である。正しくは950年6月20日から951年6月8日、つまり950/951年であり、ペリーの挙げる西暦(960/961年)とは10年のずれがある。2つ目の勘違いはヌーフ・ブン・マンスールの治世として原注72に記されているイスラーム暦354~375年である。この統治年は西暦では965~986年に相当し、第7代マンスール1世と第8代ヌーフ2世の治世にまたがる年代なのであって、第8代ヌーフ2世つまりヌーフ・ブン・マンスールひとりの統治年ではない。ところが、このイスラーム暦に当てた西暦976~997年のほうは合っていて、まさにヌーフ・ブン・マンスールの統治年となっている。ペリーはこの2つの勘違いをもとに議論を組み立てているわけである。碩学ペリーがなぜこのようなペリーらしからぬ初歩的な勘違いを犯したのか、それは謎としか言いようがない¹²⁾。このミスを行っていな

¹²⁾ ペリー『シンドバードの書の起源』を訳出したとき、ペリーの記すイスラーム暦339年=西暦960/61年を鵜呑みにし、それを基準に原注72に記されるその他の、ペリー自身の記す箇所を除くイスラーム暦すべてを西暦に換算し、訳書中に〈 〉を付して記入してしまった。理解しやすいようにと老婆心ながら書き加えたわけであるが、確認を怠った訳者の不注意であり、読者に誤った情報を与えてしまったことを陳謝しなければならない。

かったなら、ペリーはいったいどのような結論を導き出していたであろうか。必ずや別の結論にたどり着いたに違いないのだ。痛恨のミスと言ってもいいであろう。

サマルカンディーの挙げるイスラーム暦339年は第5代ヌーフ1世の治世中の年である。年号からはダリー語版作成を命じたのはヌーフ1世ということなのであるが、サマルカンディーはそのアミール名を「マンスール」（つまり第8代ヌーフ2世）と記しているわけである。では、年号とアミール名とどちらが間違いなのか。新版の編者アッ・ディーニーがアミール名を「ナスル」に変えていることはすでに記しておいた。写本には「マンスール」となっているのである。旧版の編者アテシュも、アミール名のほうが間違いであるとしている。ペリーはさらに問題をややこしくして、イスラーム暦539年（西暦1144年）と記されている写本があるというリュウの報告を記したうえで、サマルカンディーの記す「339年」は「359年」が「誤り伝えられた結果である」と結論付けている。イスラーム暦359年は西暦969/970年に当たるが、イスラーム暦339年を西暦960/961年としたペリーは、このイスラーム暦359年を迷わず西暦980/981年に当たると換算した、つまり第8代ヌーフ・ブン・マンスールの治世中のことと判断してしまったのではないか。正しい対照によれば、イスラーム暦339年（西暦950/951年）は第5代ヌーフ1世すなわちヌーフ・ブン・ナスル（943～954年）を指しているのである。

既述のように、写本に記されている「ナーシルッディーン・アブー・ムハンマド・ヌーフ・ブン・マンスール・アッサーマーニー」の中に記される「アブー・ムハンマド」という添え名は「ヌーフ・ブン・ナスル」の添え名であり、「ヌーフ・ブン・マンスール」の添え名は「アブ・ル・カーシム」である。イスラーム暦339年という年号とアブー・ムハンマドという添え名から判断するならば、アミール名のほうが間違っているという結論のほうが正しいように思える。『古典ペルシア文学』の著者アーベリーも、「ザヒーリー〔・アッ・サマルカンディー〕はその父親をナスルではなく、うっかり間違えてヌーフ2世の父親であるマンスールとしている」と記している¹³⁾。

ちなみに、ヌーフ・ブン・ナスルの父ナスル2世は2人の名宰相に補佐されてペルシア文化の保護・奨励に努めたので、都ブハーラーは東方イスラーム世界における一大中心地になったという。その宮廷にはペルシア詩人の父と呼ばれ、「シンドバード」を作詩（散逸）したルーダキー（940年没）がおり、その治世はサーマーン朝の頂点であった。ヌーフ・ブン・ナスル（第5代ヌーフ1世）も父に倣ってペルシア文芸に寄与しようとしたのであろう。サマルカンディーが勘違いして記したヌーフ・ブン・マンスールとその父マンスール1世の時代には民族叙事詩の先駆者とされ、未完に終わった『王書』の作詩で知られるダキーキー（978年頃没）がいた（脚注11の pp. 5, 16, 7, 29f.）。

¹³⁾ A.J. Arberry, *Classical Persian Literature*, George Allen & Unwin, London, 1958, p. 166.

以上から、序文③は次のように理解できることになろう。ダリー語版の成立年はサマルカンディーの記す通り「イスラーム暦339年（西暦950年）」であるが、アミード・アブ・ル・ファウアーレス・ファナールギーにダリー語版を作るよう命じたアミールはヌーフ・ブン・ナスル、つまりサーサーン朝の第5代ヌーフ1世であって、ヌーフ・ブン・マンスールとしたのはサマルカンディーの勘違いであったのだ。序文③に記されるアミール名ヌーフ・ブン・マンスールをヌーフ・ブン・ナスルに置き換えるのは正しい事であり、そうすることによって何の矛盾もなくそのすべてを受け入れることができるのである。そして、ファナールギーが使用した原本はパハラヴィー語で書かれていた。そして、そのパハラヴィー語版は広本であったということになろう（脚注8の拙論を参照）。

パハラヴィー語版の前にインドで書かれた『シンドバード物語』があったのかどうかを検証する前に、序文③に現われる言語について、その理解に資すると思われることを記しておこう。

パハラヴィー語とは中世ペルシア語のことであり、サーサーン朝（226～651年）の公用語であった。サーサーン朝滅亡ののちも9～10世紀に至るまでこの言語によって記述・著作が続けられた¹⁴⁾。現存するパハラヴィー語文献のほとんどすべては9～10世紀に書き記されたものであるという¹⁵⁾。そして、M・ボイスによると9世紀においてもゾロアスター教の平信徒でさえまだパハラヴィー語の読み書きができたというが、パハラヴィー文字で中世ペルシア語の本を書くことは10世紀までに事実上終わったも同然であるとのことである¹⁶⁾。濱田正美によれば、サーサーン朝の公的な話し言葉はパハラヴィー語もしくはサーサーン朝の出身地であるファールス地方の言語であり、それがダリー語と呼ばれた（現在アフガニスタンで使われているダリー語とは厳密に区別しなければならない¹⁷⁾）。宮廷の言葉という意味であるという。651年、サーサーン朝を滅ぼしたアラブは、初め征服地の行政のためにその地方で用いられている言語をそのまま採用していた。ウマイヤ朝（661～750年）の第5代カリフ、アブドゥルマリク（685～705年）が697年にアラビア語を公用語とするが、ホラーサーンと中央アジアでパハラヴィー語からアラビア語への切り替えが

¹⁴⁾ ジャーレ・アームズガール／アフマド・タファッヅリー『パハラヴィー語——その文学と文法』山内和也訳、シルクロード研究所、1997, p.2

¹⁵⁾ 同上、pp. 16, 18.

¹⁶⁾ M・ボイス『ゾロアスター教』山本由美子訳、講談社学術文庫、第10章、pp.292, 298. 大阪大学の奥西峻介名誉教授の私信によると、パハラヴィー語を読めるだけではなく、ある程度書いたりできた下限は14世紀までであるが、文学作品の創作などというレベルならばせいぜい7世紀頃であり、9世紀頃に書かれたものには明らかに間違いが見られるという。御教示に感謝。祖本の言語レベルがどのようなものであったのかは、もとより確かめようがない。

¹⁷⁾ 黒柳恒男『ペルシア語の話』大学書林、pp. 83f. 同『ペルシアの詩人たち』東京新聞出版局、p.4

開始されたのは、ウマイヤ朝滅亡も近い742年のことであり、それまで戦士の登録台帳はパハラヴィー語で記されていたに相違ないという。一方で、征服者と被征服者の共通の話し言葉はダリー語であり、公的な書き言葉としてのアラビア語と共通の話し言葉としてのダリー語が用いられる環境の中から新たなペルシア語が誕生してくる。つまり、ペルシア語はダリー語の故地であるファールス地方ではなく、まさしく中央アジアで成立したのだという¹⁸⁾。中央アジアがイスラーム化するのは10世紀以降であるともいわれる¹⁹⁾。東イランにおいては臣民との意思疎通の可能な言語としてのアラビア語の足場はさほど強くはなかったのだ²⁰⁾。

その間、文学活動がさほど活発でなかったことは確かなのであろう。後世に名を残す作品はほとんどないと言ってもいい。それゆえにこそペルシア文学史上の「沈黙の二世紀」と呼ばれたのであろう。イランの学者ザッリンクーブの命名だという²¹⁾。その表現がいささかセンセーショナルであったがゆえに、かえって安易に使われ過ぎているようにも思う。サーサーン朝が滅亡した途端に、ナイフでスパッと切ったようにそれまで使われていたパハラヴィー語がアラビア語に切り替わったわけではないであろう。パハラヴィー語に固執した人々が居続けたであろうし、その中に作家が含まれていたであろうことも想像に難くない²²⁾。言語の切り替わりはごくゆっくりと進んだのだし、完全に置き換わったわけでもない。パハラヴィー語から、ゆっくりペルシア語へと移り変わっていったのだ。ウマイヤ朝のあとを受けたアッバース朝（750～1258年）がペルシアびいきであったこともあり、やがてサーマーン朝（873～999年）の時代に新たに生まれ変わったペルシア語（＝ダリー語）による文芸活動が一気に開花する。この文芸復興は821年に樹立されたターヒル朝とともに始まるが、サーマーン朝こそ、ペルシア語文芸復興に非常な貢献をした王朝であったのだ²³⁾。この時代の特色として、詩人の活動地域がイラン東北部、すなわちホラーサーンとトランスオクシアナに限られ、他の地域にほとんど及んでいなかったことがあげられる²⁴⁾。そのためダリー語作品にはイラン東部の地方的語彙が豊富に含まれ、時とともにイランの他地方の人々に理解困難なものとなって、作品の現存数も極めて少ないという（脚注17『詩人たち』pp.15, 34）。祖本からいったんダリー語に移された『シンドバード物語』に、さらなる書き換えが必要となったのもそうした理由によるのであろう。広本である祖

¹⁸⁾ 小松久男編『中央ユーラシア史』第三章「中央ユーラシアの「イスラーム化」と「テュルク化」」（濱田正美執筆）山川出版社、新版世界各国史4、2000、pp.152ff. 黒柳、脚注17『詩人たち』p.6f.

¹⁹⁾ 森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界』北海道大学出版会、第4章（菅原睦、p.131）

²⁰⁾ フォーヘルサング『アフガニスタンの歴史と文化』前田耕作・山内和也監訳、明石書店、p.297.

²¹⁾ 黒柳恒男、脚注11。pp.1f., 4, 16. 森本一夫編、脚注19、p.5

²²⁾ この間に書かれた詩の存在については、疑問もあるようだが黒柳、脚注17『詩人たち』pp.8ff.

²³⁾ 黒柳恒男、脚注11、pp.3f., 16. 森本編、脚注19、p.5

²⁴⁾ 黒柳恒男、脚注11、p.17

本の系統を受け継ぐ『シンドバード物語』はサマルカンディーによって救い出された作品であると言ってもいいのかもしれない。

さて、『シンドバード物語』はベンファイが主張したようにインド起源なのであろうか。ベンファイは、『シンドバード物語』で語られている物語のすべてが他のインドの作品に採り込まれてしまったために書物全体としての興味・関心が失われ、インドにおけるサンスクリット語版『シンドバード物語』祖本は消滅してしまったのだと言っている²⁵⁾。だが、物語好きのインド人がそのようなことをしたとは、とうてい考えられない。インドにおいて、祖本が失われてしまった作品はないわけではない。パイシャーチー語で書かれたとされるグナーディヤの『ブリハット・カタール』を筆頭に、『パンチャタントラ』『屍鬼二十五話』『鸚鵡七十話』『獅子座三十二話』等、文学史に名を連ねる名立たる作品はすべてそうである。物語が写本で伝えられていた時代、作者が係わった原本の消滅は避けがたい当然のことであると言っていることなのであろう。しかし、原本そのままとは言えないまでも、ともかくそれぞれ数々の派生伝本は残されている。そうした伝本の痕跡すらなく、書物全体が他国にはあるがインドにおいては完全に消滅してしまった物語集というのは、恐らくないと言っているであろう。『シンドバード物語』もインドで祖本が書かれたのであれば、それを受け継いだ作品があってもよさそうであるが、インドには、ペリーも言う通り、その痕跡すら残されていない（原文 p. 2、拙訳 p. 3）。これが先行作品だとすぐに分かるような作品は、インドには何ひとつとして残されていないのだ。仮にインドで書かれたとして、それが総体としてインドではまったく受け入れられず、西方でのみ歓迎されたとも言うのであろうか。少なくともベンファイが言うような、所収話が他のインドの作品に取り込まれてしまったがために、物語全体がインドにおいては消滅してしまったのだという推測を認めることは、きわめて難しい。そういう物語がかつてあったことすら、古来より物語好きなインド人の誰ひとりとして書き記していないのである。やはり、『シンドバード物語』祖本はインドで書かれたものではないと結論づけざるを得ない。

同じ結論が、残されている『シンドバード物語』そのものからも導き出せる。インドの作品には、町の名、その町を治める王の名、親の名、主人公の名、その妻の名、その他登場人物の名など、中には冒頭に一度しか登場しない人物にも名が与えられていることが多い。固有名詞の洪水である。そのことは『パンチャタントラ』や『鸚鵡七十話』を見ればすぐに分かることである。ペリーは言う、「『シンドバードの書』がサンスクリット語祖本

²⁵⁾ ① Th. Benfey, „Nachweisung einer buddhistischen Recension. ... Zugleich einige Bemerkungen über das indische Original der zum Kreise der <Sieben weisen Meister> gehörigen Schriften“, p. 190. In: *Mélanges Asiatiques*, III, 1853-1859, pp. 170-203/ ② Th. Benfey, *Pantschatantra*, Bd. I, Leipzig, 1859/rpt. Georg Olms, 1966, § 8, 41p.

から翻訳されたものだとするなら、『カリーラとディムナ』の最古の版に見いだされるような、明らかにサンスクリットの名を持つ少なくとも何人かの登場人物と、『シンドバードの書』の中の2人（王とシンドバード）以外にも名前を与えられているもっと多くの登場人物がその中にいてもいいはずである。〈中略〉名を与えられた登場人物がたくさんいることがインドの物語本すべてに特徴的なことであって、名を与えられたそのような登場人物が『シンドバードの書』にはそれほど現われていないことは、この書物がインド起源ではないことを示すもうひとつの指標なのである。〈中略〉ペルシア人翻訳者が自分の訳している書物に書かれている名をすべて省いてしまったということは、ほとんどありそうもないことである」と（原文 pp. 49f、拙訳 pp. 78f.）。

それに対して、「インド」という記述に関しては少し異なる見方が可能かと思われる。ペルシア語版 ZaS の物語冒頭は、「インドの国にクールディースという名の王がいた」という記述で始まっている²⁶⁾。この記述についてペリーは、「物語本の中で『インドの王』と書かれるのは、インドの中で書かれた書物でよりも、インドの国境の外側で書かれた書物においてこそ……期待されることなのである」（原文 p. 47、拙訳 p. 74）と言い、それを『シンドバード物語』がインド起源ではないという証拠のひとつにしようとしているように思える。「インド」と言うのは私たちであって、彼らではないのだ（原文 p. 47、拙訳 p. 75）、というわけである。ペリーと同じ見解は早くも『大唐西域記』に見ることができる。「印度の人はその地方地方に随^{したが}ってそれぞれの国号をとなえているが、遠方の外国では遙かより全体の名をつかい、その美しとするものを口にして印度といっている」（2・1・1）²⁷⁾。「インドの中で書かれた書物」に関して言えば確かにその通りであるのだと思う。しかし、翻訳となるとどうなのであろうか。現代における原典に忠実な「翻訳」というのとは異なり、訳者の恣意的な操作がいくらかでも入る時代の翻訳である。サンスクリット語で書かれた『タントラ・アーキヤーイカ』（『パンチャタントラ』の前身）の一伝本が西伝してパハラヴィー語に翻訳され、それがさらにシリア語とアラビア語の『カリーラとディムナ』となった。その事実を疑う者はいないであろう。翻訳の底本とされたパハラヴィー語版は残されていないし、さらにその翻訳底本となったサンスクリット語版も残されていない。そういう意味では確認はできないのではあるが、『カリーラとディムナ』に一番近いと思われる『タントラ・アーキヤーイカ』と比べても、忠実な翻訳とは言えないことは想像できる。その『カリーラとディムナ』の現存する最古の翻訳は古典シリア語によるもの（570年頃）なのであるが、残念ながら冒頭部分が欠落している。しかしアラビア語版を見ると、物語

²⁶⁾ 脚注 1① p. 31、② p. 23、③ p. 27.

²⁷⁾ 玄奘『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社・中国古典文学大系22、昭和47年

は「インド王、ダブシャリムは……」という記述で始まっている²⁸⁾のである。『タントラ・アーキヤーイカ』には「インド王」という記述はもちろんない（「南の大地にミヒラーロピアという名の都城がある」で始まる²⁹⁾）。『パンチャタントラ』小本・広本もほぼ同じ始まり方である）。つまり、翻訳の場合にはある程度その出自を意識して、補足的・説明的に「インドの王」という言葉を入れてしまうこともあり得るのではないかということである。『鸚鵡七十話』についても同様の指摘ができる。『シンドバード物語』祖本より遅い成立と考えられる『鸚鵡七十話』は、ペルシア語に訳されて『^{トゥーティーン・ナーメ}鸚鵡物語』となった。翻訳の嚆矢はイマード・イブン・ムハンマド・アッ・サグリーの『物語の宝石』（1314年）である。その梓物語冒頭には「インドのいろいろな本に見られるおもしろい話の中にこんながある」と書かれている³⁰⁾。この『物語の宝石』を、当時としては平易なペルシア語に改めたナハシャビーの『鸚鵡物語』（1330年）の第一話には、「インドのある町に〈ムバーラクという名の裕福な商人がいた〉」と書かれている。サグリーもナハシャビーも執筆時には地理的には今のインドにいた。つまり、征服地はすでに元の国ではなく自分の国、すなわちインドの外と理解するか、インド人かそうではないのかで理解するか、どちらの理解の仕方をするかによって玄奘のような「印度の人は」という表現になるか、ペリーののような「インドの中で書かれた」という表現になるかが分かれるのかもしれない。『シンドバード物語』の場合にも『カリラとディムナ』と同じことが起こっている可能性があり得る。仮に『シンドバード物語』祖本がインドで書かれたとしたら、その冒頭は『タントラ・アーキヤーイカ』などと同じように始まっていたのであろうと推測されるが、パハラヴィー語に訳されたときに「インドの国」という語句が追加された可能性はおおいにあり得るのではないかということなのである。しかし、インド起源ではないことを示している説得的な他の証拠から判断するならば、この「インドの王」の問題は一指標ではあり得るものの、絶対的なものではないと考えるほうがいいと思われる。ちなみにギリシア語版 Ss は「キューロスという名の王がおり」という記述で始まる³¹⁾。国名が記されていない点についてペリーは、「キューロス……がペルシアを統治していたなどと言うのは、少なくとも物語本においては余計なことだったのであろう。おそらくそれが、なぜギリシア語版 Ss とシリア語版 Sn のどちらにも国名が記されていないのかの理由なのである」（原文 p. 48、拙訳 p. 76）と言っている。シリア語版も同様の語句で始まっている³²⁾ことから推測すると、

²⁸⁾ イブヌ・ル・ムカッファイ『カリラとディムナ』菊池淑子訳、平凡社・東洋文庫、p. 45

²⁹⁾ *Tantrākhyāyika*, übersetzt von J. Hertel, B.G. Teubner, Leipzig und Berlin, 1909, p. 2

³⁰⁾ Imād ibn Muḥammad al-Taḡrī, *Jawāhir al-Asmār*, ed. by S. Āl-i Ahmad, Tehran, Ferdos, 2006, p. 21

³¹⁾ 脚注 3、① p. 3、② p. 12

³²⁾ Fr. von Baethgen, *Sindban*, J.C. Hinrichs'sche Buchhandlung, Leipzig, 1879, p. 10（拙訳、シリア語版『シンドバーン物語』作新学院大学紀要、第15号、2005, pp. 31-60の p. 36）

ペルシア語版 ZaS との相違は、小本編者ムーサーに由来するものと見て間違いないのであろうと思われる。

ところで、ペリーのペルシア起源説を受けて、インド起源説の巻き返しを図ろうとした論文がある。アラハバード大学の H.S. ウパディヤヤ「『シンドバードの書』のインドの背景」である³³⁾。ペリーの説に困惑したカリフォルニア大学のアーチャー・テイラー (Archer Taylor) の要請を受けて、著者が『シンドバード物語』に似た、昔話を中心とする物語を集めた論文である。AB の 2 部からなり、A はスペイン語版 LE とシリア語版 Sn の梗概を記し、B に「『シンドバード物語』に利用可能なインドの素材」として 4 項目を立てている。「その 1」は継母の悪意・讒言をモチーフとする話として『ラーマヤナ』(II 9ff.)、ジャータカ 472、クナーラの物語、『クマラ・ラーマ・チャリタ *Kumara Rāma Charita*』、『サーラングラ・チャリタ *Sārangdhara Charita*』を挙げる。

「その 2」は『パンチャタントラ』第 5 章「思慮なき行為」を取り上げ、それが『シンドバード物語』祖本の杣物語であったろうとして、その所収話の梗概を記している。これを『シンドバード物語』祖本の杣物語とすることはそもそもあり得ないことであり、取り上げているのも 1199 年のプールナバドラによる広本であるので、時代的に『シンドバード物語』と逆である。そこには確かに『シンドバード物語』所収話と関連する物語が 3 話 (V1「獵犬 *canis*」、V8「猿の王 *rex simiarum*」、V9「猿 *simia*」) 含まれてはいるが、これを『シンドバード物語』祖本であろうとするには相当の無理があると言わざるを得ない。

「その 3」は『シンドバード物語』と同じ構造を持つ昔話として AT916 (= ATU916)「王の寝室を守る兄弟たちと蛇」に相当する昔話を列挙している。王の寝室を守るために数人の兄弟が雇われ、その 1 人が毒蛇を見つけて殺すと、毒が妃の上に落ち、それを拭いている間に目を覚ました妃が彼を責め、王が死刑判決を下す。他の兄弟が性急な判決を諫める物語を 4 話語り、やがて朝になると真実が明らかになるという物語である (『王と四人の大臣 (アラケーサ王物語)』がある)。そこで語られる 4 話のうち確実に『シンドバード物語』所収話の類話と言えるのは第 1 話「潔白な犬」 (= ATU178A.「獵犬 *canis*」) のみであり、第 3 話「ハヤブサと毒入りの水」 (= ATU178C) は、ペリーは「毒入りミルク *lac venenatum*」の類話としているが、すでに明らかにしたように、確実な類話とは認めがたいものである³⁴⁾。他の 2 話は『シンドバード物語』には含まれていない。性急な判断を諫めるために物語を語り、死刑判決を受けた兄弟や同僚を救うというモチーフが共通しているという意味では『シンドバード物語』と関連があると言えないことはないが、あくまで

³³⁾ H.S. Upadhyaya, 'Indic Background of The Book of Sindibad', in: *JSTOR: Asian Folklore Studies*, vol. 27, No. 1, 1968, pp. 101-129

³⁴⁾ 拙論「『シンドバード物語』所収話の泉源」作大論集 3, 2013, pp. 1-24 の pp. 13-16

も関連があるというに留まる。さらに、この物語そのものがいつごろのものなのかはまったく不明であり、果たして『シンドバード物語』祖本よりも古いものであるのかどうかもまったく分からないのである。ウパディヤヤはインド各地で採集された類話を5例挙げているが、この物語が全体としてこのように各地に残されているのであれば、『シンドバード物語』が全体として、あるいはナハシャビー『鸚鵡物語』の第8夜に見られるような縮小された形ですら、インド各地に残されていない理由はまったく不明としか言いようがない。ATU916の類話はインドばかりではなく蒙古にもあることを考慮すると、なおさらである³⁵⁾。

「その4」は『シンドバード物語』サイクルに属し、個々に伝承されて来たという昔話を挙げているが、「獵犬 canis」以外は『シンドバード物語』には含まれていないものばかりである。残念ながらこの論文は『シンドバード物語』インド起源説を復活することには失敗していると言わざるを得ない。

『シンドバード物語』には、インドに古い類話の見いだされる物語やモチーフが数多く見られる。だが、それも不思議なことではない。ビールーニーによれば、古代においてはホラーサーン、ペルシス、イラク、モスル、シリア国境に至るまでは仏教文化圏であった³⁶⁾。アショーカ王（阿育王。紀元前272～232年）が仏教を広めるために伝道師をシリア、エジプト、マケドニア等に派遣したことによるのであろう³⁷⁾。3世紀のバビロニアには仏教徒ばかりではなくバラモン教徒もいたという³⁸⁾。スキュタイ（サカ）人を祖先に持つ「シャカ族出身の釈迦が説いた仏教は……イラン民族が足跡を残した中央アジアには違和感なく受け入れられた」とも言われる³⁹⁾。詳細は分らないが、サーサーン朝ペルシア（226～642年）内で仏教が流行した形跡もあるらしい⁴⁰⁾。230年、ゾロアスター教が国教になると仏教徒は駆逐されて行き、アフガニスタンのバルフだけになって、そのバルフも8世紀初頭にはムスリムの手に落ちる。8世紀後半から9世紀初頭にかけてバグダードのカリフを支える行政官として有用な役割を果たしたバルマク家の祖先はそのバルフの仏教集

³⁵⁾『蒙古族民間故事選』内蒙古自治区社会科学院文学研究所編（上海文芸出版社）所収「知恵鳥」（pp. 171-174）。この「知恵鳥」には斧原孝守氏による梗概が「比較民俗学会報」第30巻第4号、2009.9、13p.にある。『シッディ・クール』（西脇隆夫編、溪水社）16「陽光夫人」も参照。

³⁶⁾ Alberuni's India, Vols. I & II, Edward C. Sachau, Low Price Publications, Delhi, 2003, p. 21。バルトリド『中央アジア史概説』〈「トルキスタン史」1963の全訳〉長沢和俊訳、角川文庫、第2章も。

³⁷⁾「標準世界史年表」吉川弘文館。井本英一編『東西交渉とイラン文化』勉誠社、2010、p. 56

³⁸⁾ 前嶋信次『世界の歴史8 イスラム世界』「ササン朝ペルシア」河出文庫、p. 30

³⁹⁾ 井本英一「ミトラ信仰の東西」（井本英一編『東西交渉とイラン文化』勉誠社、2010、p. 11）

⁴⁰⁾ 松田壽男『アジアの歴史』岩波現代文庫、2011、p. 116。同時代ライブラリー版では p. 110

団の長として、さらにはおそらくバルフ全体の支配者であったようであるとされる⁴¹⁾。玄奘の記録からは西北インドから西域にかけて部派仏教のひとつ説一切有部が栄えていたことが分かるという（脚注27の『大唐西域記』10・1・1への注3）。そして、イランにおける仏教寺院の破壊は13世紀後半のこととされ（脚注20の p. 317）、おそらくその頃までは中央アジアとインドは1つの文化圏を形成し、ギリシアから伝播した物語をも含めて、多くの物語がその地域の共有財産であったのだと推測される。

そのことを裏付ける証拠がサマルカンド（現ウズベキスタン）の東60キロメートルほどのところにあるペンジケント（パンジケントとも。現タジキスタン内）の壁画に見られる。中国からビザンチウムに至るシルクロードを股にかけて東西交易の主人公として活躍したソグド人が6世紀から8世紀にかけて残した壁画である⁴²⁾。

ペンジケントの第6セクター第41室の壁画（現在はサンクト・ペテルブルクのエルミタージュ美術館「ロスタム室」所蔵。その北側の壁画が最初期のもので6世紀のものと思われる）に多数のロスタム関連の壁画のほかに次のような4点がある。①「愚かな白檀商人」の絵（Fig. 32）。説明では『シンドバード物語』「盲目の老人 *senex caecus*」が暗示されているが、同時に記されている物語梗概からは『百喻経』22「海に行って香木を手に入れた話」によるようである。香木を入手したものの高価で売れずに困り果て、炭が良く売れているのを見て、香木を炭に焼いて売って大損をした男の話である。②「猿の王 *rex simiarum*」（Fig. 49。同じ題材の壁画が第6セクター第8室〈Fig. 83〉と第21セクター第1室〈Fig. 84-85〉にもある）。仏典によるものであろう。③『パンチャタントラ』（年代的には『タントラ・アーキヤーイカ』の伝本と思われるが、著者マルシャークに従って『パンチャタントラ』とする）第1巻からライオンと牛とジャッカル（Fig. 36-37）。④同じく『パンチャタントラ』第1巻から「善玉と悪玉」（Fig. 42）。第6セクター第13室には⑤『マハーバーラタ』からの場面（Fig. 94-95）。第21セクター第1室に次の4点。⑥『屍鬼二十五話』22「ライオンを再生した兄弟たち」（Fig. 81）。『パンチャタントラ』第5巻にもある。⑦『パンチャタントラ』第1巻から「ライオンと賢い兎」（Fig. 88）。⑧同じく第1巻から「蠅を追い払おうとして男の頭をハンマーで砕いた猿」（Fig. 82。これは『タントラ・アーキヤーイカ』にも『カーリーラとディムナ』にもないので、猿が登場する話がこの頃までに成立していたことを示していると言える）。⑨「小鳥の三つの助言」（Fig. 78。『バルラームとヨアサフ』で有名な話だが、仏典に拠るのであろう）。⑩イソップ寓話

⁴¹⁾ 脚注20の p. 289f. イブン・ハルドゥーン『歴史序説』森本公誠訳、岩波文庫第1巻 p. 358の訳注では「バルフの仏教大寺院の世襲院主」であったという。伊東俊太郎『近代科学の源流』第5章、中公文庫、p. 173f. 前嶋信次『世界の歴史8 イスラム世界』「黒旗、黒衣の時代」

⁴²⁾ 以下 Boris Marshak, *Legends, Tales, and Fables in the Art of Sogdiana*, Bibliotheca Persica Press, New York, 2002による

より「金の卵を産む鷺鳥 (Aes.87)」(Fig. 86)。本論に関連しそうな題材は以上である⁴³⁾が、東西の有名な題材がこうして小さな町の壁画に残されているのを見ると、いかに多くの物語がこの地方に集まっていたかが分かる。

マルシャークは『シンドバード物語』はインドのテキストから中世ペルシア語に訳されたと書いている (p. 65) ので、そのインド起源説を支持しているようである。年代的に見て『シンドバード物語』からの直接の影響はないものと思われるが、『シンドバード物語』所収話と同じ起源を持つ話からの影響なのであろう。

ここまで記述してきたことをまとめてみよう。

まず、サマルカンドの序文③から、パハラヴィー語版の存在は確認できる。所収話のすべてが他の作品に採り込まれてしまったがためにインドにおける『シンドバード物語』は消滅したのだというペンファイの見解は受け入れ難い。インドに『シンドバード物語』が存在したといういかなる痕跡のかけらもない。現存するいかなる『シンドバード物語』にも、インド作品に特徴的な固有名詞の洪水が見受けられない。インド起源説の復活を目指したウパディヤヤの試みは失敗している。以上のことから、確認できるパハラヴィー語版『シンドバード物語』を祖本と認めざるを得ないことになろう。書かれた地はペルシアだということになる。

では、その祖本はいつごろ書かれたのであろうか。

年代の上限は所収話「砂糖 *zuchara*」に現われている3つの物、すなわち米と篩と砂糖が推測の手掛かりになるのではないと思われる。米と篩と砂糖はいつ頃からペルシアにあるのであろうか、あるいはいつ頃ペルシアに伝播したのであろうか。該当する物がない場合、創作であれ翻訳であれ、それを作品中にそのものとして表現することはありえないか、至難なことである。読者・聴衆に理解されないからである。それが米と篩と砂糖として表現されているということは、祖本が書かれた頃、ペルシアにその3つがあって、誰もが知っていたということになる。

篩から始めよう。紀元前1200年を中心として長い間に作られたとされる『リグ・ヴェーダ讃歌』(辻直四郎訳)の最新層に属するとされる第10巻に「粉を篩によって〔清むる〕」という表現が出てくる(10・71・2)。『リグ・ヴェーダ讃歌』の最新層は紀元前1000年頃とみていいのであろうが、篩そのものはもっと古くからあったものと考えていい。それがインド・イラン共通時代にさかのぼり得るものであるならば、イラン(ペルシア)でも相

⁴³⁾ このうち⑥⑦⑩の3点は曾布川寛・吉田豊編『ソグド人の美術と言語』臨川書店、p. 133でも見ることができる。

当古い時代から篩は知られていたと考えていいであろう。『アヴェスター』（伊藤義教訳）「ホーム・ヤシュト」3（ヤスナ11・3）には「漉されても」という表現があり、篩の存在を前提しているとみていい。『旧約聖書』「アモス書」9・9にも篩が出てくる。プリニウス『博物誌』（中野定雄・中野里美・中野美代訳。1世紀。18.28.108）にはガリアの諸属州は馬の毛で作った一種の篩（cribrorum genera）を発明し、ヒスパニア（スペイン）では亜麻で、エジプトではパピルスとトウシンソウで篩（excussoria, pollinaria）を作ったと記されている。プリニウスの時代にはローマ帝国全土で使われていたものと思われる。5世紀初頭の406年に鳩摩羅什の訳した『法華経』（成立は紀元前後。坂本幸男・岩本裕訳）6・16「如来寿量品」に菓草を「擣^{つきふる}篩い^{ふる}和合して」とあるので、中国でも篩は知られていたと見ていい。

アラブについてはブハーリー（810～70年）『ハディース』（牧野信也訳）「食物23(3)」に、「アッラーのお召しを受けてから亡くなるまで神の使徒（＝ムハンマド。570年頃～632年）は篩を見たことがなかった」というサフル・ブン・サアドの言葉が記されている。サフル・ブン・サアドは預言者ムハンマドと同時代の人のようなので篩がアラブに伝わったのはムハンマドの死後間もなくの650年頃のことと仮定していいであろう。ムハンマドの時代に篩がなかったことはイブン・ハルドゥーン（1332～1406）も『歴史序説』（森本公誠訳）3・26「カリフ位の王権への変質」の中に記している。ブハーリーの記述から分かることは、ブハーリーとはほぼ同じころに亡くなっているムーサー（874／5年没）が『シンドバード物語』祖本をパハラヴィー語からアラビア語に翻訳編纂して小本を作り上げた9世紀中頃にはアラブにおいても篩は普及していたので、ムーサーは何の問題もなく「篩」として訳すことができたということである（『アラビアン・ナイト』に吸収されずに独立して伝承されてきたアラビア語版 At では篩は ghirbāl となっている⁴⁴⁾）。『アラビアン・ナイト』146夜「鳥獣と人間との物語」には、篩の目が粗いか細かいかで異なるという2種の篩製造人ガラービリーとマナーヒリーが登場するが、この物語はもともとは古い動物寓話であり、アラビア語に訳されたのも篩がアラブに伝わったのちのこと、つまり650年頃よりのちのことと考えられる。

米は西暦100年を中心として活躍したアシュヴァゴーシャ（馬鳴）『ブッダ・チャリタ』（原実訳）12・96に食料としての米が出ているし、350から400年（辻直四郎『サンスクリット文学史』§25。訳者岩本裕は300年頃とする）に書かれたシュードラカ『土の小車（ムリッチャカティカー）』第1幕（序幕）にも米が出てくる。これより早い例もあるであろうが、今はこれで十分である。ペルシアにおける米の栽培は家島彦一によると、「サーサーン朝ペルシャ帝国時代の後期には、フージスターン地方の……低湿地帯で稲作がおこなわれて

⁴⁴⁾ 脚注1① pp. 347-388所収の p. 362

いた。そしてアッバース朝時代には、ティグリス川流域（や）……バグダードに近いクーサーなどの諸地域にも、その栽培地が拡大していった」という⁴⁵⁾。サーサーン朝ペルシア帝国時代（226～642年）の後期というのがいつ頃からのことなのか明らかではないが、仮に前期・中期・後期として等分にしていいのであれば、後期はおよそ500年以降のこととなる。フージスターン地方はペルシア湾に面し、イラク国境に接しており、ティグリス川にも近い。アッバース朝は750年から始まる。ちなみにペルシアで稲作が始まる以前から輸入されていたインド産の米は、栽培開始後も引き続きアラビア海を越えてアラビア半島の各地に運ばれていたという⁴⁶⁾。バルトリドによると、パミール高原に源を発し、サマルカンドやブハーラーを流れるザラフシャン川の流域で稲作が行なわれていたという情報が5世紀にあるが、稲作がその遙か以前から行なわれていたことは「おそらく疑いが無い」という⁴⁷⁾。これらのことを考え合わせると、ペルシアでは500年頃以降であれば、米はまだ高価ではあったかもしれないが、富裕層には普及していたとみて問題はないと思われる。ちなみに「砂糖 *zuchara*」では金貨を渡し、ギリシア語版 *Ss* では銀貨を渡している。

砂糖はインドで紀元前から知られており、砂糖きびを原料とする砂糖の生産は紀元後1世紀頃、あるいはそれ以後にインド北部で始まったとされている⁴⁸⁾。『アヴァダーナ・シャタタカ』41のグダシャーラー物語⁴⁹⁾には砂糖きびを搾る500の工場の存在が記されている（『撰集百緣経』41も参照）。『根本説一切有部毘奈耶雜事』17（大正蔵24、282ab）には、砂糖きびを盗んで罪に問われた僧のことが記されている。西方への伝播についてはアレクサンドロスのインド遠征に係わっているらしい。アレクサンドロスの重臣ネアルコスの遠征記録から引用したと思われる「彼（ネアルコス）は葦に関しても、蜜蜂がいらないのに蜜を作ると述べている」という記事が、ストラボン『地理書』⁵⁰⁾（1世紀初め）15・1・20（C694）にある。そこに見られる葦とはもちろん砂糖きびのことであり、イスラーム以前の7世紀初めにはすでにサーサーン朝治下のイランで砂糖きびの栽培と砂糖の生産が始まっており、7世紀半ば以降になるとイラク南部にも達し、イラク中南部では第2代のカリフ・ウマル（在位634～644年）が砂糖に課税しているという（佐藤、脚注48, p.24f.）。砂糖きびの栽培と製糖業が、いつ頃ティグリス・ユーフラテス流域に移行したかについては、「確実な証拠を欠くが五、六世紀頃に」ジュンディシャープールに樹立されたいとも言われる⁵¹⁾。ペルシアに伝わった年代については7世紀初めだとされる一方で、ホス

⁴⁵⁾ 家島彦一『イスラム世界の成立と国際商業』岩波書店、p. 319

⁴⁶⁾ イブン・バットウータ『大旅行記』家島彦一訳、平凡社・東洋文庫、14世紀、第3巻解説 p. 422

⁴⁷⁾ バルトリド『トルキスタン文化史』小松久男監訳、平凡社・東洋文庫、第1章

⁴⁸⁾ 佐藤次高『砂糖のイスラーム生活史』岩波書店、2008、p. 20

⁴⁹⁾ 奈良康明訳『仏弟子と信徒の物語』筑摩書房、No. 4

⁵⁰⁾ ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』飯尾都人訳、龍溪書舎

⁵¹⁾ 関野唯一『世界糖業文化史』邦光書房、p. 51

ロー・アヌーシルワーン（在位531～579年）の時代、インダス・デルタ西方のメクラン州が固形糖の重要な産地であった（関野、脚注51, p. 53）というから、6世紀後半にはサーサーン朝ペルシアに伝わっていたと考えていいのであろう。ジュンディシャープールは7世紀頃にはメソポタミアの砂糖製造の中心地となっていたようである⁵²⁾。従って「砂糖 *zuchara*」は7世紀以降ならばペルシアで受け入れ可能ということになるが、8～9世紀以降、宮廷や富裕層の間で砂糖が用いられるようになってからも砂糖は高価であったようで、庶民は果物を濃縮したジュース状の甘味料を使い続けていたし、9～10世紀のバグダードで「砂糖の甘味」を楽しんでいたのは「特権的でしかも富裕な階層の人々、具体的にはカリフとその一族、高級官僚や軍人、それに大商人であったと思われる」とのことである（佐藤、脚注48, pp. 70, 75）。17世紀においてすらインド以外の国では砂糖が高価な商品であったことを、フランソワ・ベルニエが記している⁵³⁾。ペルシア語版「砂糖 *zuchara*」から判断するなら、砂糖はそれをあげると言うことによって人妻を誘惑できるほど十分に貴重で高価な商品であり、夫が妻に渡すのが金貨であることから、この男はいち早く米や砂糖を享受できる富裕層に属する男であったのであろう。いろいろな説がある中で年代を決めることは難しいことではあるが、佐藤次高の言うように、砂糖がペルシアの宮廷や富裕層の間で用いられるようになったのが8～9世紀以降であるなら、ひとまず700年頃以降ならばすぐにも彼らに理解されたと推定していいのだと思われる（さらに50年ほどさかのぼる可能性もあるのかもしれない）。つまり、「砂糖 *zuchara*」がペルシアの読者・聴衆に受け入れられるのはそれ以降のことであり、当然のことながらそれを含む『シンドバード物語』祖本もそれ以降の成立ということになる。その頃までにはペルシア語版の所収話はすべて出そろっていたのだ。ちなみに、インドにいたナハシャビー（14世紀）の類話はどういう硬貨かは記していないが、夫が「金なんかどうでもいい」と言っていることから銅貨であろうと推測されるし、同じくインドにいたカーディリー（17世紀）では銅貨を何枚か渡したと記されている。時代と地域による違いなのであろう。中国へは唐の太宗（626～649年）のときに外国からの貢物として伝わったとされる⁵⁴⁾。

以上の検討から、篩と米と砂糖のうちペルシアで使われるようになった年代のもっとも新しいのは砂糖であり、富裕層へのその普及が700年頃以降のことであると想定していいのであれば、ペルシアで「砂糖 *zuchara*」が読者・聴衆に受け入れられるのも、やはり700年頃以降のこと、それを含む「シンドバード物語」がペルシアで書かれたのも同じく700

⁵²⁾ 平野哲郎『世界の商品 I ——砂糖——』アジア経済研究所、p. 20

⁵³⁾ 『ムガル帝国誌（二）』第四章「アウラングザーブのカシミール行幸（原題はメルヴェイユ氏への手紙）」の末尾に付された「第四の質問、ベンガル王国の肥沃さと富と美についての回答」、倉田信子訳、岩波文庫

⁵⁴⁾ 陸游『老学庵筆記』巻六（中国古典文学大系56『記録文学集』松枝茂夫編、1969, p. 116）

年頃以降のことであると推測して大きな間違いはないと言えるであろう。

では、年代の下限はいつ頃なのであろうか。どれほど遅くとも800年頃までと思われるが、それにはペトルス・アルフォンシ『知恵の教え』13「涙を流す小犬2」が『シンドバード物語』広本に由来している可能性の高いことがヒントを与えてくれる。ペルシア語（サマルカンディーによるペルシア語版はまだ現われていないのでダリー語とするほうが正確であろうか）を理解しなかったペトルス・アルフォンシは、それをアバーン・ラーヒキー（815没）のアラビア語訳から採ったと推定せざるを得ないので、祖本からアラビア語訳への時間を考慮すると、祖本の成立下限はどれほど遅くとも775年頃までと推定されるのである（脚注8の拙論 pp. 12-14）。ペリーも、アバーン・ラーヒキーのアラビア語訳があるのなら、祖本の年代はアッバース朝第2代カリフ、マンスールの治世の頃（754～775年）であろうという可能性を否定していない（原文 p. 94, 拙訳 p. 153）⁵⁵⁾。R・バートンも「ターミナル・エッセイ」で、「シンドバード物語」の成立は8世紀、やはりマンスールの治世のことであろうとしている⁵⁶⁾。下限はこの775年頃とするのが妥当なのであろうと思う。パハラヴィー語版『シンドバード物語』祖本の成立年を700～775年と推定するなら、『シンドバード物語』に収録された物語の中で、今見られる話型の「砂糖 *zuchara*」は成立の最も新しい層に属する物語のひとつなのであろう。

ペリーは『シンドバードの書の起源』（原文 p. 93. 拙訳 p. 152）で、『シンドバードの書』の創作時期を579年と650年の間とすることを許さないような事柄は、物語自体の中には何ひとつ見当たらないと書いている。その根拠は「獵犬 *canis*」「雉鳩1 *turtures 1*」がブード訳のシリア語版『カリーラとディムナ』（570年頃）から採られたと考えたためらしい（原文 p. 90, 拙訳 pp. 146f.）。しかし、「砂糖 *zuchara*」から見ると、その年代はやや早すぎると言える。「シンドバード物語」のムーサーによるアラビア語訳小本編纂は9世紀中頃のことなので、何の問題もない。

では、ペルシアのどのあたりで書かれたのであろうか。700～775年頃のペルシアの言語状況から、651年のサーサーン朝滅亡以降、アラブの征服による影響が遅く現われて来て、被征服者の言語であるパハラヴィー語がアラビア語に呑み込まれずに、ダリー語を経て新

⁵⁵⁾ H. Schwarzbaum, *International Folklore Motifs in Petrus Asfonsi's <Disciplina Clericalis>* (in: *Sefarad*, 1961, p. 274) によると、ラーヒキー以前にアラビア語訳があるとのこと。*Hagigat ha-Pertiḥa shel ha-Universita ha-Ivrit*, Jerusalem, 1925に掲載された J. Horovitz の論文の p. 70を参考文献として挙げているが未見。事実であるならこのアラビア語訳は広本に属する可能性が高いが未詳。これが広本であるなら祖本の下限はもう少しさかのぼることになるのかもしれない。このアラビア語訳に言及する他の研究者はアン・ナディーム『フィフリスト』を含めて管見に入っていない。

⁵⁶⁾ バートン版『千夜一夜物語』大場正史訳、河出書房、第7巻所収「巻末論文」p. 334（§1, C）

たにペルシア語へと姿を変えていった地が、『シンドバード物語』祖本が書かれた地であると推定するのがもっとも自然なことかと思われる。そこはまた膨大な数の東西の説話が流れ込んで行った場所、すなわち、ニーシャープール、メルブ、ヘラート、バルフを擁するホラーサーンから、サマルカンド、ブハーラーを擁するマー・ワラー・アンナフル（川の向こうの地。トランスオクシアナともいい、ほぼソグディアナと重なる）のあたり。大雑把に言えば、ペルシア東北部、中央アジアのどこかであったろうと推定されるのである。

作者名は伝わらないが、サーマーン朝（873～999年）におけるペルシア文芸復興の遙かな先駆者のひとりとみなしていい人物であったろうと思われる。

確かに、祖本より古い所収話や素材、モチーフはインドで記録されたものが多い。現在確認できる最古の類話はインドのものが多いのは厳然たる事実なのであるが、それらは、もっと古い時代に西からインドに伝播し、たまたまインドで記録されたものが最古の記録であるということも十分にあり得る。所収話にどれほど多くのインド由来の物語が確認されようと、書物としての『シンドバード物語』の起源はインドではなくペルシアなのである。イソップ寓話に由来する物語も、ミーレトス風の物語がルーツであろうと思われる物語もある。ローマ由来の所収話「五歳の男の子 *puer 5 annorum*」も間違いなく存在している。そうした東西の物語が集積していた地を誕生地とするのが自然であろう。ペリーもこう言っている（原文 p. 43、拙訳 pp. 66f.）、「私たちにとって重要なのは、ある特定の書物の起源なのであり国籍なのであって、そこに含まれている民間伝承の究極の起源ではないのだ。〈中略〉『シンドバード物語』に〈中略〉もっと多くのインド的な思想と内容が含まれていようと、書物としては完全にペルシア起源であるということがありうるのである」と。

ペリーはシンドバード、シマス、バルラームの関係に触れている（原文 pp.93～94、拙訳 pp.151～153）が、それについては拙訳『シンドバードの書の起源』解説258～260ページを参照されたい。ペリーはバルラームの起源について今日の定説とは異なる判断をしているし、私見ではアラビア語版のバルラームも十分に禁欲的であると思う。

* 次ページに関連年表を添付する。

関 連 年 表

000		
100	この頃アシュヴァゴーシャ『ブッダ・チャリタ』『サウンダラナンド』	←2c. 頃現存『ラーマーヤナ』(注: BC4c.~AD4c.) ↗この頃『ジャータカ・マラー』(注)
200	この頃『パンチャタントラ』祖本(注) 250頃康僧会『旧雜譬喻經』 300まで『大智度論』	*文献: 注=辻直四郎『サンスクリット文学史』 干潟=干潟龍祥『ジャータカ概観』 田中=田中於菟彌『『鸚鵡七十話』とその宗教的背景』 Ott = C. Ott, 101 Nacht
300	300頃『タントラ・アーキヤーイカ』(注)	←4c. 頃現存『マハーバーラタ』(注: BC4c.~AD4c.)
400	5~6世紀前半、シュードラカ『蓮華の贈り物』	←5c. 中頃現存『ジャータカ』(偈の部分は1c. 頃か?)
500	『ハザール・アフサーナ』(Ott) 550頃パハラヴィー語『カラタカとダマナカ』(プルゾーエ) 570頃シリア語『カリラグとダムナグ』(ブード)	←アヌー・シルワーンの治世(531~578) ←この頃パハラヴィー語版『バルラーム』(マニ教徒版)?
600	7世紀『ヴェーターラ』祖本(干潟124p., 注 §118) (632ムハンマド死) カシュミール本『プリハット・カター』(KBK, 注)	『シンドバード物語』 【広本】 【小本】
700	750頃アラビア語『カリラとディムナ』	700-775祖本(パハラヴィー語) (パートンはマンスールの治世 <754~775> のこととする)
800	この頃『ハザール・アフサーナ』のアラビア語訳(Ott) この頃『アラビアン・ナイト』の最古の写本断片(Ott)	815/6までアバーン・ラーヒキーによる祖本のアラビア語訳
900	900-950ナーラーヤナ『ヒトーパデーシャ』(注) 900-1100 小本『パンチャタントラ』(注)(1000-1100?)	950/1ダリー語版 (ファナールージー)
1000	1000-1050 『鸚鵡七十話』祖本(田中は7-12世紀) 1030頃クシェーメーンドラ 1080頃ソーマデーヴァ	1072以前アズラキーの韻文版 (ペルシア語。未完)
1100	1106頃ペトルス・アルフォンシ『知恵の教え』 1150頃『アラビアン・ナイト』への最初の言及(Ott) 1199ブルナバドラの広本『パンチャタントラ』 1199以降広本『鸚鵡七十話』	1160頃サマルカンドイー版 ZaS (ペルシア語。ダリー語版より)
1200	(注 §124, 年表。小本のほうがより古いと思われる)	13c. ヘブライ語版 MiS ^{A, B} (12c. 末以降~。Bは南仏で?) 1234/5『百一夜物語』最古の写本 1253スペイン語版 LE
1300	1314アッ・サグリー『鸚鵡物語』	1330ナハシャビー版 TN 1375ペルシア語韻文版 SN
1400	初ナフザーウィー『匂える園』	年代不明。ZaS より。
1450	以降ガラン写本(282夜まで。Ott)	トルコ語版 T (17c.) ジョージア語版 G
		1407ラテン語版 mis ^A 15c. 『アラビアン・ナイト』に採り込まれた各版(SVB, SVC ² ; SVH, SVS)は遅くとも15c.